

見にくい人間の心、あさはかな私達の心。  
人には寛に、自分には厳に。

(四年一巻)

612

今日學校へミシンを掛けにいった。年のくれなので誰も来て居なかつた。ゆつくりかけていかうと思つて朝の十時頃から夕方の五時頃まで居た。歸る時になつてあたりを見たら、糸屑や紙が澤山ちらばつてゐた。

誰も來ないのに不思議だと思つたがやはり自分がみんなちらかしたのだつた。常に友達と一緒に仕事してゐて、みんなあの人達がすることのみ思つてゐたのに今日始めて自分のえて、勝手なことを覺つた。

今度から掃除する時、皆んな自分がしたのだと思つてやらう。きつと不思議な位綺麗になるに違ひない。

(四年一巻)

613

「私があんなに度々手紙をやるのに、あの人はずつともよこさない。」

太陽人主義。  
九三番を見よ。

614

朝、希望を抱いて起き、晝、努力を捧げて働き、夕、感謝に溢れて眠れ。かくすれば君の居る所、日々皆好日であり、年々皆好年である。

(太陽人主義)

615

人は誰しも幸福を求めてやまぬのであるが、神様はいつも人の足元にチャンスと幸福をおいておかれる。

しかし、人は多く遠い／＼影のやうな幸福を探し廻る。

只本當の人間のみがその足元の幸福を見付ける。

自分が少し多く手紙をやつた時、きまつてかう思ふ私だつた。だが、此の頃の私は……。あまりにも我儘だ。自分の落度のある時はいやにべこ／＼したがかり、落度が無いと知るや威張りながる私。卑劣な自分が本當に耻しい。

(新K・II巻)



足元に氣をつけよ。

(幸 佐藤スイ)

616

人生の眞の幸福。

金。地位。名望では断じて無い。

明るい大道を濶歩し得る。これ人生最上の幸福である。

(幸 近藤登代)

617

他人を不幸にする自分の幸福を求めてはならぬ。

(人生日記)

618

人間の悩みは思ひ通り叶はぬ事から起る。思ふことの多くは不當な願である。先づ思ふことを整理すれば悩みは半減する。

(感想)

619

今日、雪の爲ひどく眼をいためたといふ人が訪ねて來られた。その人は茶色の眼鏡をかけて居られた。その方の話の中に、「私はかうやつて眼を痛めてはる

人生日記。  
五五番を見よ。

感  
所々に見えたり。  
想。

620

あめ玉をほうばりながらお汁を作りました。

最後に味を見る段になりました。しかしあめ玉をほうばつて居ては決して正しい味を見ることは出来ません。先づあめ玉を出して口をすすぎ、しばらく待つて、それから味を見なければなりません。

ますが、まだく世の中を色眼鏡かけて渡りたくないと思ひますよ……。」  
側に聞いてゐた私は全くさうだと思つた。

肉眼は損はれても、心眼は曇らさないといふ此の心持を本當に尊く思ふ。

私達の中には立派な兩眼を持ちながら、好んで色眼鏡により、凡べての事物を正しく透視し得ぬ者が少なくないといふ事は實際考へて見なければならぬ問題である。

色眼鏡の世界から完全に脱却し、常に正真正銘のものを寫し受け入れるやう、私達はあらゆる努力を惜んではいけない。

(幸 近藤登代)



本居宣長先生が、「先づ漢心を捨てよ。で無ければ決して正しい立派な日本の國体は見つからない。」と言はれたのも此の事でせう。

私達はまづ無の境界に入つて、それから靜かに眼を見開いて見るべきものでせう。そしたら、きつと正しい公平な理解を持たれるでせう。  
(四年K生)

## 621

「本場の林檎だ。」といふ前ぶれいで、如何にも艶々と美しい、眞紅の、形のよい林檎をいただいた。

早速皮をむいて食べて見たがさつぱり結構で無い。ガラリ期待ははづれた。

私共は、「本場だ」といふかけ聲でまづ目がくらんでしまふ。そしてをいしいものと信じ切つてしまふ。

色を見る。如何にも美しく赤い。

形を見る。如何にも恰好がいよ。

かうして私共の眼は二重三重にもごまかされてしまふ。

## 622

枯枝に烏とまりけり秋の暮。

俳聖その人の心境をうかゞふことは、おろかなる自分には出来ないけれども、表面にあらはれた靜かな、何ともいはれぬ寂しをりのたゞよつてゐる情緒は、しみじみと私の心をうつものがある。

この時の眼はしびれてゐる。正視する力は既にないのだ。

けれども本場など銘のうつつであるものは味つて見れば大方駄目のものが多い。所謂幻滅の悲哀といふものを感じる。

色か……………否。

形か……………否。

香りか……………否。

赤裸々の中味の味そのものである。

眞相を見破る眼がほしい。



二年の時であつたか、私は「森の繪」といふ文章を読んだ。作者の名さへ知らぬ一枚の繪に、深い憧憬の心を懷き、熱望したそのはてに、どうとう夫れを得る事の出来た時の歡喜、少年のその幸福を私はどんなにかうらやましく想像した事であつたらう。今でも私はそれを思ひ出すと、涙もろさうな彼の母の慈愛と、少年の純真な姿がまぎ／＼と眼の前に浮んで来て、なつかしい、親しい、しみ／＼とわいて出るやうな喜を感じるのである。

今の場合、私は彼の少年に似てゐる感謝を此の句から受けたのだ。自分の本心を知り得たやうな、たとへば老境のさとりともいふべき、そんな落付いた安心な氣分にひたつて居る。そして凡人の眼には、何の意味も與へてくれない、ふとしたありふれた光景が、俳聖の神心を透ると、私達の心に何物かを傳へる。私は彼の俳聖の深い心の眼をたまらなく尊敬する。

(四年 M 生)

「見ても見直せ火の用心」

こんな標語が私の目に止つた。

本當によい言葉だと思ふ。

火の用心に限らず、すべて私達の行動に關係づけていゝ問題だ。

ドアをビシャンとしめた。そして走り出した。

其のあとにそのドアが、二十糎程の後戻りをして開いて居ることは、後を見ずに駆け出した彼には分らなかつた。

一度見直してからあげて来た靴棚からは靴は落ちない筈だ……………。

私達の動作の一つ／＼に、もう一度見直すといふ習慣が出来たら、過失、失敗は減ぜられてゆくわけた。

見ても見直せ……………。

本當にいい言葉だと思ふ。

(卒 花川 雅子)



いつも學校へ入學したやうの氣持にあられたら。

624

役者は死ぬまで修業でございます。

役者は何をおきましても稽古が大切でございますして、稽古を十分積んでゐないと良い芝居をすることが出来ません。

稽古と申しますれば、藝の稽古が大切の事は申すまでもありませんが、平生のすべての行が稽古でありまして、それが舞臺の上に反映するから恐ろしいものでございます。

又手馴れたもの程私は稽古が大事だと思ひます。よく知りぬいたものは、ともしれば緊張味を欠き易いものですから、心の緩みから飛んでも無い粗雑な藝を御覽に入れることになるものです。

父は、いつも「芝居中、毎日々々初日のつもりで芝居せよ。」と申して居りましたが、今でも私はその教を忘れた事はありません。

又「役者は舞臺に出る前後の心構が肝腎だ」とも常に申してゐましたが、實際、これから愈々舞臺に出るといふ時、すつかり落着いてからで無いといけま

自分のやつたことを見なほす心。

銘々劇のけいこの時のことを考へよ。

中村氏。  
歌舞伎の名優。  
東京日々新聞による。

625

せん。出る少し前は心を十分に落ちつけて、おもむろに舞臺に立つ。又幕が下りてからも、そよくさどかつらを取つたり、衣裳をぬぐやうではなりません。一度鏡に向つて、ちつと自分の姿を見て、どこかに整はない所があつたのでは無いかを調べてからはじめて自分に還るやうにしなければいゝ藝は出来ないと思ひます。

又私共役者には、丁寧といふことも大切なことで「弱い弓も強く引く」といふ小笠原流の弓術の精神のやうに、如何なる端役も心を入れて丁寧に演じることが何よりでございます。

(中村吉右衛門氏の談話)

ある時の會合の席上、話の序に、食物のうちでは米の飯はどうまいものは無い。といふやうなことが話題となつたことがあるが、色々考へさせられることがあるやうに思ふ。

第一に、凡そ古くから用ひられて居るものは如何に平凡であつても、その内に



深い意義があるものだといふことが此の米の飯といふ一句のうちに含まれてゐると思ふ。あれでも無い、これでも無いで、どこのつまり極つたものは恐らく平凡なもので、いつまでも實用に堪へるものであらう。山海の珍味は結構であらう。辛辣なものは食慾をそよるであらう。併しそれは常用とする事は出来ない。若しそれ等を常用とすれば、必ず厭あきるのは勿論身に故障を生ずるであらう。

これは食物ばかりの事では無い。衣服でも住居でも同様である。

第二に、米の飯がすべての味を包有して居るといふ事であつた。すべてを包有して居るから一番うまいのではあるまいか。又それだから常用されうるのであるまいか。

さういふ事を言ふ時、私はいつも譬を取るが、光線は七色を合せて無色になつたものである。光りの無色は何も無い無色ではない。あらゆる色を包有した無色である。七色の夫々はきれいであるが、無色の光には及ばないわけである。

戸川秋骨氏  
現代評論家。

第十回オリムピック  
大会。

スタチアム  
競技場。

626

萬事がそこまでゆかねば駄目だと考へて居る。淡々として無味なる如くであるが、實はあらゆる味を持つて居るといふ、その境地に入らなければ人間の修行もまだ足りないのだと思ふ。利害得失を離れ、打算の外に超然たるやうになつて始めて完璧の域に達したと言へよう。

味が無いやうであらゆる味をもち、用の無いやうで第一の用に立つ、これ位立派なものはあるまい。

(戸川秋骨氏)

ロサンゼルスに催されたオリムピックの競技に出場した我城戸中佐について、次のやうな外国人まで感動せしめた話がある。

中佐は出場した後、馬が非常に疲労してゐる事を發見した。そこで三回飛越えなければならぬ障害物を二回飛んだのみで三回目を中止した爲遂に失格した。中佐は非常に疲れて居る馬に鞭をあてるに忍びなかつたのである。さうして中佐は其場で馬のそばについて長い間我子を劬いたはる如く看護した。然るに其



後に出場した某國の選手の馬にも同様甚だしく疲れたのがあつて、城戸中佐同様飛ぶことを中止したが、此某國の選手は其馬を其まゝ馬丁に曳かせて退場せしめ、自分は平然として別の方面に去つてしまつた。この二つの光景を目撃してゐた彼地の動物愛護會の人々は、某國選手の態度に對照して城戸中佐の行動に大に感動し、城戸中佐にメダルを贈り尙ほ城戸中佐が自己の愛馬を劬つて居る姿を同スタジアムの一角に刻込み、永久にこの麗しい行爲を記念しようといふ話があるといふ。

かくの如く弱者を劬はる博愛の心はいはゆる忍びざる心で尊き限りであると思ふ。

武藤山治氏  
所々に見えたり。

(武藤山治氏)

## 627

河内國赤坂村字水分小字森屋は楠家代代の邸のあつたところで、有名な赤坂城も此村の西方の丘地で、此高地つゞきの三味所と呼ぶ墓地の中の老松の下に大五輪の塔が堂々と立つてゐる。風雨六百年の苔深くむして、松吹く風も昔なが

らに「寄手塚」と呼ばれてゐる。又此塔の南方に同形の小塔が淋しく立つてゐて「味方塚」と稱されてゐる。此二墳こそ大楠公一代の偉蹟中他に類例のない史實を物語るもので同時に日本武士道の眞髓を示す世界的史蹟である。元弘の昔、大楠公が後醍醐天皇の勅命を奉じて赤坂の小砦に天下の軍を引受けて勤王軍第一の烽火を擧げた時、敵の遺棄した死體を拾ひ集め、味方の戦死者と並べて二つの塚を築いて恩怨不二、平等無差別に篤く葬つた古墳で「味方塚」に對照して「敵」と云はずに「寄手塚」と呼んだところに如何にも大楠公の床しい風格が偲ばれる。更に此古蹟を訪うて意外とするところは味方塚が平地に極めて簡素な五輪の塔なるに反し、寄手塚は塚に積み上げられた墳上に堂々たる五輪の大塔が安置されてゐて、餘りにも其懸隔が著しいので訪ふ人皆奇異の感を抱くが、これは寄手方の戦死者が味方のそれに比べて數倍に上つてゐたことも想像されるが、それにしても寄手に篤く味方に薄い大楠公の態度は人道上海大なる教訓を示してゐる。

(武藤山治氏)



我國のある所では白  
分の子供より學問の  
すぐれた子供の辨當  
に毒を入れて大さわ  
ぎになつた事件があ  
つた。

日本の生んだ世界的の大數學者理學博士菊地大麓氏が、曾て英國劍橋大學に在學中の頃は、劍橋大學では彼が唯一の東洋人であつたが、その勉學はよく他の幾千の英國の學生を壓倒して、常に首席を以て一貫してゐた。

然るに菊地氏と首席を争ひ、惜しくも常に第二位の成績に置かれてゐたブラウンといふ學生があつた。彼は「他國の學生に首席を占められてゐる事は、我が大英國の國辱である」と云つて、更に一層の馬力をかけ、何とかして菊地氏を超越して首席を得ようと、死物狂ひの努力を續けた。ところが、その後菊地氏はふとした事から病氣に冒されて入院し、長い間缺席の止むなきに至つた。英國の學生達は大に喜び、早速ブラウンを捉へて「おいブラウン君、菊地の奴今病氣でノートがとれないから、今度こそ君は首席をとれるぞ、僕等も奴には皆ノートを貸さない事に約束したから、この際君も大に馬力をかけてやつてくれ給へ」と、口々に言つた。するとブラウンは沸然と色をなして「えゝ黙らない

か。君達はそれでも英國の學生か。人の病氣につけ込んで首席を占めるなごとは、何といふ汚い事を云ふのだ。僕は不肖乍ら英國人の誇りを犠牲にして迄、首席を得ようなどとは断じて思はんぞ」と大喝して、さつさと其場を立去つた。ブラウンはそれから時々見舞ひに行く一方、缺席當日からその日／＼のノートを綺麗に別紙に寫しとつて、菊地氏の病床に送り届けるのを日課にしてゐた。やがて菊地氏は病氣も恢復して學期試験を受け依然として第一位を占めた。従つてブラウンは相變らず第二位に止まらねばならなかつたが、菊地氏が再び首席になつたのを見て「これで僕は英國人の誇りを傷つけずに済んだ」と云つて、獨り莞爾として喜んだ。

此事は後に菊地氏が、其名聲を世界の學界に謳はれるやうになつてからも永く心を離れず、菊地氏は常に

「私の學生時代の益友は十指を屈する程あるが、就中この時のブラウン君の高潔な英國魂位、私を深く感動させたものはない」



武藤山治氏  
所々に見えたり。

ナホレオン  
佛國の皇帝。

孟子  
支那の儒學者。

629

と語つてゐたといふ事である。此話は「美談逸話辭典」の中に載せられてゐるものであるが實に他山の石とするに足るものである。(武藤山治氏)

吾辭書に不可能の語なし。

(ナホレオン)

能はざるにあらざるなり。

(孟子)

出来るか出来ないか。

あなたはやつて見ましたか。

それさへやらすにとても出来ないこと

手をつけないとしたら

あなたも

やらないで解ると考へる

自力と希望  
賀川正雄氏著。

630

近代的賢人病にかゝつてゐるのです。

出来ないかも知れぬ。

さう思へてもやるだけはやつて見ませう。

愉快なものですよ。

出来ても出来なくても

がんばるといふのは。

まして

出来る事だのに出来ないなんて。

あんたはたしかに病氣です。

(自力と希望)

「甲は途中で自分に遇つても一度だつて『お早よう』といふあいさつをした事が無い。」といつて憤慨する人がありますが、甲が「お早よう」といはねば、



金剛石  
所々に見えたり。

良寛さまの歌。

631

自分の方から「お早よう」とやれば、きつと先方も「お早よう」とあいさつをするにきまつてゐます。人が先にはぬからなごとお互に偉い顔をして毎日不愉快な生活を續けてゐる程馬鹿氣た話はありません。よく「天下無敵」といふ事を云ひますが、敵を作るやうではだめです。自分を敵にしてゐる人にでも自ら進んで好就好感を持つて交際したなら、昨日の敵も今日の味方となつてしまひます。人を敵視してゐるうちはまだく修養が足らぬ証據です。頭を先へ下げる位の事が骨が折れるやうでは何事も成意しません。先方が悪意を持つてゐる場合は、こちらが進んで好意を持つて迎へる位の勇氣がありがたいと思ひます。

(金剛石)

いかなるが苦しきものと問ふならば  
人をへだつる心とこたへよ

自力と希望  
六二九番を見よ。

千里隔てゐても近いものはなに  
傍にゐても離れてゐるものはなに。

むづかしい謎かけ。

上げませう。

解いた心は  
ころろです。

相反く二つの心は

此の世の地獄を創ります。

相寄る魂は

そのまゝ天國なのです。

(自力と希望)



632 他人のなした悪い事に對しては、自分で無い事を明らかにする爲に眞先になつて「自分で無い」といふ心も

自分のなした悪に對しては「自分がしたのだ。悪かつた。」はつきり云ひ得ない心も

ともに本當に情無く思ふ。

(平 淺野 著 校)

633

嘗つて太平洋横斷飛行に成功した名飛行家ハーンドン、バングボーン兩氏を訪ねて、彼等が斯の如き難航に成功した秘訣に就て或人が質問したところ其答は次の三語で盡きた。

Fly High (高く飛べ)

Fly Straight (眞直に飛べ)

Fly Slow (徐々に飛べ)

これは非常に面白い言葉であつて能く味つて見ると、獨り海上飛行といふ特殊なる場合のみでなく吾々が人生の行路を立派に歩み通す爲の洵まことに善き教訓である。

「高く飛べ」といふのは理想を常に高くかゞげ、堅き信念を抱いて進むことで世間の毀譽褒貶などを意に介せず超然として邁進することである。飛行家の場合に就て言へば雷電や雲霧や氣流等の變化極りなき低空は之を突破して上空を飛んで行くことである。勿論上空飛行に於ては海も嶋も船も見えない、只遙か下に雲霧が漂つてゐる外何ものも目標とするものはない一面からは淋しい頼りなき飛行である、然しながら永遠に變りなき太陽は輝き月は照つて行手を指して居る、下空を飛ぶと色々の物が見えるやうに、俗界に於ては様々の批評を聞き惑はされる。佛蘭西の哲學者ジャンボーウルは「批評は樹より毛蟲を取ると共に花を取ること屢々である」と言つてゐるが味ふべき言葉である。

次に「眞直に飛べ」といふのは羅針盤を以て能く測定した上で此方向誤りなし



武藤山治氏  
所々に見えたり。

634

と信じたならば脇目もふらずにその方向へ一直線に飛んで行く事である。直線はあらゆる場合に於て二點間の最短距離を結ぶ一線だからである。人生に於ても最後の勝利を占めんと欲せば正しい道を外れずに歩み通すにある。勿論之には忍耐と克己が必要であるが邪道に外れるよりは遙に樂である。更に「徐々に飛べ」といふのは急速度を出せばエンジンに狂ひが出来勝なるものである。萬事に氣を配つて徐々に飛ぶ方が意外なる蹉跌無くして却つて早く目的地に到達することが出来るといふことを示したものである。吾々日本人は兎角早まつて事を仕損じる傾向がある。一氣呵成がよい場合、必要な場合もあるが、凡ゆる場合に於てそれが正しくはない。徐に堅實に秩序的にやつて行く、即ち不撓不屈の勇氣と努力が吾々を成功の彼岸に達せしむる要素である。

(武藤山治氏)

不平を言ふのは「私は人に憎まれてまじこ繼兒扱ひにされて居る」と告白するに等し

い。故に之れを愚痴ぐちといふ。之に反して、感謝するのは、「私は人に愛せられ、又敬はれて居る」と告白するに等しい。故に感謝は人間としての禮儀であると言つてもよい。

(金剛石)

635

山の上にある町は隠るゝことなし

山の上にある町は人の目から隠れる事が出来ませんから、どこから見ても悪い所が無いやうに始終きれいにしておかなければなりません。

私達も山の上の町のつもりになつて、うしろぐらい事や、耻しい事をしないで、いつでも明るく、ほがらかに暮していきたいものだと思います。

(三年 8 生)

636

今朝一寸したことで、一日中母に氣まづく暮させてしまいました。母に言はれた時すぐにすなほにその通りになれば好かつたのですが……、やはりまた磨



かれてゐない爲だと耻しくなります。

そして夜床に入つてから本を見ながらじつとその日の出来ごとを考へて見ました。ふとあるページに「和げよ」といふ題目で書いた詩のやうなものがありません。

和げよ。争ふ心を耻ぢよ。

詫びるがいよ。

詫びる理由が無いといふか？

省みよ。

いくらかきつとわるからう。

相手の心を亂しただけでもたしかに悪い。

負けよ。詫びてくれ。

いやであらうが頼むから。

平和の神、今汝の胸の扉を叩く。

私はこれを読んで目を閉ぢました。そして今一度今朝の出来事を考へて見るのでした。

さうした事か次から次と涙がこぼれて來ます。

そして母の氣まづさうな顔が目にもちらついて來ます。

もうこれからは……。

私は深く心に覺悟をきめました。

(平 渡邊トヨノ)

637

後悔は誤れる過去を送る花束であるとしたら

それは何の價値も無いものだ。

腐れた草鞋である。

使つて了つた金貨に劣る。

後悔は新らしい力をもつてする

首途の祝盃だ。



それでこそ悔に意義あり  
尊さが生れるのだ。

私達は過去の爲に悔いず  
將來の爲に悔いよう。

悔は燃ゆる力の誕生だ。

悔は第二の出発点だ。

世の中はピラミッド

あなたはこれを作る石です。

自力と希望  
賀川正雄氏著。  
六二九番を見よ。

(自力と希望)

世の中は星座  
あなたはその中の一つの星。

世の中は大きな家

あなたは柱を固める一本の釘。

世の中は軍艦

あなたは甲板を締める一箇の釘。

無価値と云つてはなりません。

あなたの占める重要な地位を思ひなさい。

あなたが動けばみんなゆるむ。



自分勝手に軽々しいふるまひの出来ないわけがそれなのです。

(自力と希望)

638

下の家へよその人が品物をかへしに來た。そしていふには

「有りがたう御座いました。何もつかひませんでしたよ。」

「何もつかひませんでした。」とは此の場合いふべき言葉であらうか。ちつとも使はなくとも、「お借りして大變助かつた。」となぜ言はぬのか……………」

下の人達はそんな事を言はれてどんな氣持で受取つた事か？

第三者の私でもはらくして聞いてゐた。

(四年 8 生)

639

伯父の箸が折れた。

といふので一ぜん箸を買つて來た。

處が、伯父の箸箱は、その箸を入れるには餘りにも短かすぎた。で已むを得

640

私は今日の作法の時間に見るともなしにみんなの靴下を見てゐました。

新らしいのに、きれいについてであるのに、親指の所が切れてゐるのに、膝頭からすつと下の方までも切れてゐる人、かゝとの全部出てゐる人、これをカバーでかくしてゐる人。それは／＼たいしたものでした。今裁縫箱から針と糸を出

す、箸箱と同じ長さを持つた箸と代へて來た。

私は考へた。

一体箸が大事なのか、それとも箸箱が大事なのか。と。

箸箱は箸を納める道具である。この場合箸が本体であるべきは言ふまでも無い。入れ物が小さいと言つて、氣に入つて使ひよい箸をみすみす買ふ事が出来ぬとあつては、さつちが本体なのかわからぬ事になる。

吾々の生活の中には、とかくかうした事が有り勝であると思ふ。

物の本体を顛倒せぬやう心掛けたいものだと思ふのである。(卒 近藤理代)



してゐる人もある。今始まるといふのにカバーを買ひにいく人もある。きちんとしてある人を見ると、立ふるまひまでがらがふやうに見える。

(二年の生)

641

一人正しく、眞面目に生きようと思つたならば、決して華美や、ちやほやされることを望んではならない。

他人から悪の誘惑を働きかけられてそれをきつぱりとはねつけた時、その人はもう自分を相手にはしてくれない。

淋しさをひそかに喜ぶ。

その相手にされなくなつた時の淋しさ、それはたまらない淋しさだ。けれども、そのたまらない淋しさをひそかに喜ぶ位にまで人間も徹底したいものだ。

(新K・H生)

642

貴方が如何に多くの人々に尊敬されてゐるか云ふことで無く、いかなる人々

多くの人々? いかなる人々?

人生日記 所々に見えたり。

後嵯峨天皇皇子佛國 國師の御歌。

修養一日一言 所々に見えたり。

643

に尊敬されて居るかといふことが重要なのである。良い人々に好かれない人は、哀むべき人であるにきまつてゐる。(人生日記)

たてぬ的 ひかぬ弓にて放つ矢は

あたられざるもはづれざりけり

小さな的を立てるから、當るの、當らぬのどさわがねばならぬのである。小さな弓を引いて是非當てて見るぞと力むから又的をはづれたなご心痛せねばならぬのである。

小名譽心、小功名心、小細工、小利口、曰く何、曰く何、さうしたものを一切捨て、人間らしい人間にならう、人間としての努めをしようとするものに、何んで當る、當らぬがありません。(修養一日一言)

644

人もすれば自分もするで、他人がどうするかを見てからのことにしようといふ



善事は一人でする。  
修養一日一言  
所々に見えたり。

一關また一關  
所々に見えたり。

感想  
所々に見えたり。

やうな了見では、善事を爲すことは出来ぬ。善事はすべて獨りでする覺悟を以て始めねばならぬ。  
(修養一日一言)

645 角力が取組まんとして一ト息入れる。その時必ず鹽をまいて土俵を清める。人間たる以上、過ちも躓きもあるべきが當然、毎日「心に鹽をまく」用意がほしい。  
(一關また一關)

646 持つたものを捨てた態度は尊い。持ちもしないものを持つたが如く装ふ姿勢は卑しい。  
(一關また一關)

647 他人の善を見ては、彼で無ければ出来ないと言つてたゞ賞めておく。自己の惡を咎められては、彼もやつて居ると言つて改めない。こんな人々を名づけて善人まがひの悪人と呼ぶ。  
(感想)

二宮翁夜話  
二四五番に見えたり。

シエークスピア  
イギリスの文豪。  
前にも見えたり。

648 世の中又物を取りやりするに、刃の方を我が方へ向け、柄の方を先の方にして出すは、これ道德の本意なり。此の意を押し弘めば、道德は全かるべし。人々此の如くならば天下平かなるべし。夫刃を我方にして先方に向けざるは、其心、萬一誤ある時、我が身には疵を付くとも、他に疵を付けざらんと心の心なり。萬事此の如く心得て、我が身上をば損す共、他の身上には損をかけじ、我が名譽は損する共、他の名譽には疵を付けじといふ精神なれば、道德の本体全しといふべし。これより先は此の心を押しひろむるのみ。  
(二宮翁夜話)

649 悪魔は人の氣に入る形をとる力をもつ。  
(シエークスピア)

650 西洋の俚諺に「悪魔は四つのいひ草で人を罪惡に導く」といふのがあるが、そ



高きに登る  
所々に見えたり。

の四つのいひ草とは、

誰でもするから、

たつた一度だけ、

これしきの事、

また前途が長いから。

651

身体の調子が好い時は、何處に胃があるか、腸があるか、肺があるか、甚だしきは手足の存在さへ知らずにあるものだ。これと同じく、仕事に熱中してれば、暑さも、寒さも、時間の經つのも氣がつかない。さうか、何時も、心身共にかうありたい。

(高きに登る)

652

ある日友達と話あつた一節、

「よく考へて見ると、自分のやつた事が良い事だつたと氣づく内はまだ駄目な

人生日録  
所々に見えたり。

魂を城くもの  
所々に見えたり。

653

「けれぎも」と起き直るのは居直強盗だ。陳謝は無條件を以て初めて意味あるのだ。

(人生日録)

んでは無いだらうか。何時よい事をしたかわからぬ間によい事をしてゐるといふので無くては本當のやうな氣がしなくつてよ。」  
「さうね。それが本當かも知れないわ。さうすると私達はまたくゝなのね。せつかくの機會さへ知らずくゝ逃してゐるんだもの……。」  
本當にさうなのかも知れない。  
いや、さうなのだらう。

(四年生)

654

一石を投ずれば池に波紋が起き、一斧を加ふれば山に響が響く。みんなことにも因果は離れない。一つの言葉、一つの行動、投げられた石はきつときつかに落ちる。

(魂を城くもの)



人生日録  
所々に見えたり。

655

自己を縛る繩の名を世には假に「享樂」と呼んでゐるのだ。繩の製作を終つた時、人は驚いて手足の不自由に泣くのだ。  
(人生日録)

656

まづ健康!

それは直ちに取つて以て精神上の標語にもしたい。

私は、からだの不健康よりも、心の不健康をより強く恐れる。

(魂を城くもの)

657

その日の仕事を了へて眠りにつかうとする時、靜に一日中の自分を回想して見る。一日のいどなみに疲れた自分を、もう一度呼びかへして見る。それは、涙ぐましい程懐しいものである。

平安なる眠。

何の思ひわづらふことも無く、眠りにつく時はうれしい。快き回想の裡にも、

無憂華  
九條武子夫人著  
前にも見えたり。

658

ともすれば、暗い影にをのましく自分を見出す時は、限り無き寂しさに襲はれずには居られない。

自分をしみくゝと省みることは度ましく生きる合掌である。私たちは、絶えざるざんげを通して丹念に生活していきたい。そして、何の憂も無く平安な眠りに入りたいと思ふ。

(無憂華)

「徳ある者の睡眠は快い」と西哲は言つた。我等は快い睡眠を貪らんが爲に有徳者とならうとするのではない。それは自然の結果であるけれど、快い睡眠を得んが爲に種々の工夫をする事は我を有徳な人と爲す爲の一つの手段である。快い睡眠を得んが爲には我等は先づ一日善く働かなければならぬ。精神を適當に働かせ、身体を相當に働かせた後で無ければ快い睡眠は得られない。一日何の爲す所もなくぶらゝと過した其の夜の睡眠は必ずだるく、不快な夢にのみ脅かされる。次には力めて善を實行しなければならぬ。我が良心に耻づる



修養生活  
二一番を見よ。

人生讀本  
所々に見えたり。

659

やうな行爲をし、他から不徳漢として蔑さげすまれるやうな行爲をして、快い睡眠の得られる道理が無い。我等の一生には、睡眠の爲に費す時間が餘りに多くて、夫れが何だか惜しいやうにも無駄なやうにも考へられるけれども、睡眠の時間は決して空しく過ごされるもので無い。快い睡眠を得る事は、實に充實した一生の大部分を作る事となるものである。  
(修養生活)

その夜の夢が安らかであることが出来るやうに一日を送り給へ。そして又その老年が安らかであるやうに若い時を過し給へ。  
(人生讀本)

伸びてゆく — 終

Asp

昭和九年八月二日印刷  
昭和九年八月五日發行

非賣品

編輯兼  
發行者

新潟市立高等女學校

代表者 中 川 秋 坪

新潟市西大畑町三丁目番地

印刷所

若 木 印 刷 所

代表者 若 木 政 次 郎

新潟市東大畑通三番町大番地

發行所

新潟市立高等女學校

(製本 新潟中大畑二長井)







